アラスカから戻ってきた
凜君のサッカーボール

最優秀賞・文部科学大臣奨励賞受賞作品

海を渡ったサッカーボール

宮城県古川黎明中学校
一年　後藤　凜

平成二十六年七月二十七日。この日は僕にとって忘れられない日になった。南三陸町にあった僕の家が、一瞬にしてあとかたもなく津波にのみ込まれてしまった、あの日。あの時流された「FC南三陸・凜」と書いてあるボールが、アラスカに流れ着いたという連絡がサッカーチームのコーチに入ったのだ。

あのボールが、三年四カ月の時を経て、僕の手に戻ってくる。あの地震さえなければ、僕はサッカーの大会に出ているはずだった。そして、スタメンに選ばれるように、必死に練習していた日々を思い出した。

地面の底の底から「ゴーッ」と響いてくる音。それがやがて立っていられないほどの大きな揺れに変わっていった、あの日。まだ学校にいた僕は、「神社に逃げろ。」という先生の声に、学校から一番近い高台の神社を目ざして走った。六年生だった兄も一緒に、へとへとになりながら、後ろを見ずに山道を駆け上った。上りきって、ふと振り返って見ると、もう、学校は津波にのみ込まれていた。

雪のちらつく中、寒さに震え、お年寄りと幼児、低学年の僕達は狭い境内の中で、六年生の兄達と大人は外でたき火をして夜を過ごした。寒さをしのぎながら、悲しみを紛らわすように歌を歌い、お供え物のみかんを一房ずつ分けて食べた。あの夜のことを僕は決して忘れることはないだろう。

夜が明け、高台から目にした景色はすさまじいものだった。電柱は全てなぎ倒され、防波堤も破壊されていた。木にはいろいろなもの、人や車までがぶら下がり、一面が泥沼になっていた。学校も、家も、町並みも…。自分が持っていることがあたりまえだったもの、それを全てなくしたことを、僕は知った。

やがて登米市の中学校での避難所生活が始まった。床にマットを敷き、段ボールで作った仕切りだけが自分たちのスペースだった。着替えもなく、集まった古着の中から自分にあった服を選んで重ね着するしかない。プールの水をくんで生活用水にし、限られた食料をみんなで分ける日が続いた。不衛生な生活のため、おたふく風邪や感染性胃腸炎などの病気も流行した。

だが、そんな毎日の中でも楽しみなことがあった。それは、学校にあったサッカーボールでみんなとサッカーをすることだった。苦しい生活の中でもサッカーをすることで元気になれた。以前とは全く違った生活の中で、僕は、自分のなくしたものをできるだけ思い出さないようにしていたが、「僕も、自分のボールで一生懸命練習していたな…。」と少しだけ「あの日」がくる前の生活を思い出していたのだった。

僕の手に戻ってきたサッカーボール。そこには一通の手紙が入っていた。「こんにちは。このボールが君の手に届くことを願っています。君のボールは、アラスカの南東部で発見され、博物館に展示されていました。持ち主である君にボールを返せることを本当にうれしく思います。私は、アラスカのアンカレジというところで歯科医をしています。また、浜辺の清掃と落とし物拾いを楽しみの一つとしています。よろしければいつでも連絡ください。あなたの友、ケビン」

ボールを最初に発見したケビンさんからの心のこもった手紙を読んで、涙がこみあげてきた。そして、日本とやり取りし、この手紙を翻訳してくれたケーシーさんという人がいたことを知った。ボールは母の車の中にあったのだが、車は今も発見されていない。このボールが、五五五〇キロもの距離を、どんな状況で流れ着いたのか、僕には想像もつかないが、たくさんの奇跡と、たくさんの人の思いがあって僕の手に戻ったことは間違いない。

僕はこの震災で、大切な思い出や家、毎日見ていた大好きだった景色、数えきれないほどのものを失った。それは、今でもとても悲しい。「あの津波さえなかったら…。」と思うこともある。不自由な生活に耐えきれず、逃げ出したくなった日もある。だが、そんな生活の中で、僕は、心から感謝することや、人の温かさを知った。父や母、祖父母に会えたとき、家族全員が無事だったことを心から感謝した。震災は不幸な出来事だが、僕は、言葉では決して表すことのできないいろいろなことを教えられたような気がする。

海はつながっている。人の心もつながっているのだ。僕の手は、まだ小さくて弱いが、いつの日かたくさんの人を支えられるように、大きくて強い人間になりたい。どんなことがあっても、僕は、しっかり前を向いて、一歩一歩進んで行く。くじけそうになったら、このサッカーボールを抱いて、僕を支えてくれたたくさんの人がいたことを思い出そう。きっと乗り越える勇気がもらえるはずだから。